



日口交流

発行 : 特定非営利活動法人 日口交流協会

E-mail:nichiro@nichiro.org

Home Page http://www.nichiro.org

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14 麻布台マンション401号

Tel : 03 (5563) 0626 Fax : 03 (5563) 0752

～活動報告～

講演会『ロシアから見たディアナ号事件』を聞く

川島 勝次

2月23日、日本記者クラブで懇話会主催の講演会が行われた。題して『ロシアから見たディアナ号事件』。講師は海上自衛官一等海佐を退官後、防衛研究所戦史部主任研究官を務められた北澤法隆氏である。

この講演会が『日口交流』誌の新年号に発表されるや否や会員でもある下田の郷土史研究家の尾形氏から早速申し込みがあった。そうこうしているうちに会員以外の伊豆地方の方々から申し込みが入ってきた。その一人に電話で聞くと、地元の新聞『伊豆日日新聞』でディアナ号の講演会の記事を見たということであった。調べてみると、戸田在住の会員で沼津市会議員の水口氏が地元の新聞に情報を流してくれたことが分かった。そのため伊豆からは5人の方が遠路はるばる参加していただくことになった。伊豆以外では、大学で水中探査の研究をされている教授も参加してくれることに決まった。最終的には、ディアナ号事件の地元である静岡県からは全部で8人の方の参加が決まった。

首都圏では、日本における水中考古学の草分け的存在の茂在寅博士の茂在会から水地探会の会長を含む3人のメンバーが、また日本潜水協会からも参加の申し込みが入った。最初のうち、申し込みの出足が悪かったが、スタッフのがんばりや朝日新聞や東京新聞の催し物案内に取り上げてもらったこともあり、全部で60人の方が参加していただくことになった。

北澤氏の講演は、1848年の創刊時から現在も刊行され続けているロシアの『海軍雑誌(モルスコーイ・ズボールニク)』から氏が訳出した史料をもとに進められた。この雑誌には海

お知らせ

● NPO 日口交流協会第10回(通算第46回)通常総会

日時: 2010年3月17日(水) 15:00～16:00

場所: 学士会館202号 千代田区神田錦町3-28

その後、記念講演「日口文化交流における偏見をなくす方法」講師はロシア連邦文化協力庁在日代表部長A.G. フェシュン氏講演及び懇親会(16:00～19:00)の会費は5000円です。会員の皆様には、詳細を別途郵送いたしましたのでご参照ください。ご出席をお待ちしております。

● 第7回文化講座『ロシアの四季』

日時: 3月26日(金) 19:00～21:30

場所: 男女平等参画センター調理室(田町駅)

参加費: 2500円(講義受講料、材料費込み)

今回は、ミモザサラダ、講義は「ロシア文化と鳥について」エブロン、タオル、持ち帰り容器をご持参ください。

● ロシア語初級クラス生徒募集中!

毎週火曜日 20:00～21:30 協会事務所にて

お問い合わせは協会事務局まで。Tel: 03-5563-0626

軍関係の記事はもちろんのこと、造船術や航海術から伝記・文芸記事まで掲載され、単なる海軍の雑誌ではなくロシア



北澤法隆氏

近代化の啓蒙雑誌的な役割も果たしていたようだ。ディアナ号事件当時のこの雑誌を見れば、この事件関係の報告が生々しく掲載されていることになる。

1853年8月、プチャーチン提督はパルラダ号を旗艦とした4艦編成で日本を開国すべく長崎に入港。ペリーに遅れること約1カ月。5回の会談で国境問題を除きほぼ妥結。1854年12月、老朽船のパルラダ号からディアナ号に乗り換え下田に入港。第1回の会談の次の日、安政の東海地震が起き津波が発生、下田の町は壊滅状態となり、湾内に停泊していたディアナ号も舵をはじめかなりの損傷を負った。折からのクリミア戦争でロシアは英仏と戦争状態になっていたため、修理中に敵に見つからない場所として砂嘴で囲まれた戸田が選ばれた。しかし舵が壊れたディアナ号は風と波に流され駿河湾の最奥の田子の浦沖に漂着。かなり浸水もしていたので全員退艦ということになり、冬の荒波の中田子の浦の住民はロシア兵の上陸を助けます。ディアナ号に同乗していたマホフ神父の記録は有名だが、この雑誌に掲載された報告にも、当時の住民が地震で大変な被害を受けているにもかかわらずロシア兵に全力を傾け救助の手を差し伸べてくれたと書かれている。

戸田で修理をするため、約100艘の舟で曳航するが突然嵐が襲い曳き船は綱を切って逃げ、ディアナ号は沈没してしまいます。プチャーチンは幕府に、ロシア本国にこの窮状を知らせるための小型船舶を作るとを願い出て、戸田で日口が協力して船をつくることとなります。その設計図を作るとき役立ったのがボートに積んであった1849年1月号の『海軍雑誌』に掲載されていたスクナーの記事だったというから面白い。

会談の方も進み、1855年2月7日日露和親条約が調印される。幕府代表の中心人物川路聖謨をロシア側は高く評価し、川路も日記の中でプチャーチンをほめている。ロシア人たちは完成したスクナーとチャーターした2隻の外国船に乗って帰国することになります。

今回この講演会には、ディアナ号に一言を持つ人たちが少なからず集まったのでロビーは名刺交換会のようになり、しばらく熱気がおさまらなかった。(懇話会スタッフ)



大道寺小三郎がこの世に現れる

大道寺会 幹事 野崎 嵩

2008年青森県弘前市に大道寺会が発会いたしました。

元みちのく銀行会長「大道寺小三郎」氏の生前の偉業を検証し、語録集の編集や記録映像の整理、保存、公開などを行っていきたくと元弘前大学学長 弘前商工会議所会頭ほか地元青森の生前交流のあった方々の自然発生的な集まりとなりました。

また、大道寺小三郎氏のご命日である7月21日(海の日)には毎年故人を偲ぶ会を行い今年3回目を迎えます。過去2回は県内外から200名を超えるご参加を戴いております。(まだまだ未熟ですが「大道寺会」ホームページも開設いたしております)
<http://www.daidoji-kai.com/>

愛する人のために出来ることは何でもやれとこの人は言う。一度一緒に酒を飲んだら一ヶ月以上いい気分で見られる。楽しいのだ。嬉しいのだ。みんな今日は彼がどこで飲んでいるか見当をつけて、彼を探し彼の話を聞きたくて彼に会いたくて集まる。銀行の部下・若い旅行会社の社員・自動車のセールスマン・飲み屋の親父・モーターの支配人、いろんな職種の人達が呼ばれもしないのに集まってくる。将来の銀行頭取候補一番手の噂がありながらまるでその風は見えず大酒を飲みカラオケなしの寮歌やクラシックの歌声は友人はだしに聞こえ店の女将の好意で酒の肴は出汁をとった後の煮干で盛り上がっていた。酒量も並でなく水でも飲むようにのんでいた。

東京支店から弘前に転勤になり相互銀行から地方銀行に変身さ

【インターネット・ニュース】

せた立役者とは、銀行員以外、この集まりの誰も知らなかった。黒っぽいスーツで包まれた存在はいかにも大柄でいつも笑顔を絶やさず集まりの真ん中にいるものの人を威圧するような雰囲気は無い。なぜか真剣に張り詰めた空気が漂っていたが、笑いが絶えなかった。誰かが質問し彼が答える。誰かが困らせようとしたとんでもない問いかけに、いとも簡単に答え一同啞然となる場面もしばしばあった。ベトナム戦争が終わってから3年ぐらい経ったころだった。『僕たち』と大道寺小三郎の始まりだった。

それから間もなく、『僕たち』とは、飲み屋の小さな集まりではなく、この地域の、彼が行動した範囲のすべての人となっていった。そして彼は頭取になった。

「どうしていいかみんなが戸惑っているときにチャンスと思っただんです」(インターネット偉人の言葉より)

みんなが戸惑っていた酷い時代の先頭に立ち、疲弊しつつあった地域やその人の心を支え本州の片田舎の町を大きく発展させていく様はここに列記するまでもありません。この奇跡的な存在と功績をもう一度顧みて今を強く生きる糧にしたいと思っています。

故大道寺小三郎氏は、当協会会長としても多大な功績を残されました。協会はこの度、大道寺会団体会員となりましたが、個人として会員になるご希望のある方は、直接大道寺会までお問い合わせください。

ロシアの温泉から—К у л д у р—

サナトリウム《クリドゥル》は黒竜江(アムール川)沿いに走る小興安嶺山地支脈の風光明媚な地クリドゥル(ユダヤ自治州)にある。溪流の流れる低地に位置し、四方を針葉樹で覆われた高い山々に囲まれている。樹齢数百年のヒマラヤスギの巨木とシナノキ、キハダ、トウヒ、ダケカンバが見事に共生し、亜熱帯地方のコルクの木も生えている。山の斜面には、マンシュウクルミ、野ブドウの茂み、木に巻きついたチョウセンゴミシ、ウコギやエレウテロコックの薬用根、コケモノの群生地、クロマメノキ、スイカズラなど数多くの有用植物がみられ、夏にはキノコが豊富にできる。

ガイドはこの地を訪れる人々に、クリドゥル温泉の発見にまつわる数々の美しい伝説を話してくれるにちがいない。ケガや病気の動物たち、また神聖なこの場所を極秘で守ってきた地元民たちが体力を回復するためにこの温泉を利用して来たことは明らかである。

このサナトリウムは極東で最も古いもののひとつで、温泉の高い名声についてはすでに20世紀初頭から専門家の注意を引いており、1910年には温泉成分の体系的研究がはじまった。1923年末、クリドゥルはロシア連邦保養地目録に正式に加えられ、1924年春、最初の療養患者が保養所を訪れた。

サナトリウム設立以来、100万人以上の人々がここで健康を取り戻した。現在サナトリウム《クリドゥル》は総合施設になり、8棟の建物、最新の治療診断機器を備えた診療所、学校に通いながら子供たちが健康を回復できる児童休養施設、最近開設されたデラックスルームのある高い建物(5号棟)やアパートを有している。

保養所で特別待遇を受けているのは、戦争功労者と勤続労働者である。彼らのために特別な病室が割りあてられ、希望すればその建物内で食事ができる。保養所の食堂にはクリーンな食材のみが納入され、上級コックが保養者の食事療法に合ったおいしくて変化に富んだ料理を作っている。

サナトリウムの各部門では専門家が働き、医療スタッフのレベルも高い。サナトリウム《クリドゥル》は多くの人々に知られており、極東全域、シベリア、極北、ザバイカルからのお客さまをいつも喜んで迎えている。(アクセス:ハバロフスクから列車で7時間、駅まで出迎えあり)

《クリドゥル》社長ガリーナ・L・コレスニコヴァ「確かな診断はあらゆる治療の基礎である」(古代ローマの諺)とあるように、患者に温泉療法を指示する前に、患者を注意深く診察し温泉は患者に効くのか、逆効果ではないのかを調べるといふルールがある。多くの労力を要する長旅や取り返しのつかない出費を患者にさせるべきではない。すべての治療は、付随する疾患を考慮し、サナトリウム・保養所カードの忠告に従って、サナトリウムの医者によって指示される。サナトリウムの基本的価値は、地下から湧き出るアルカリ温泉である。鉱物含有量0,4g/l。湧出口での温度72度。pH=9,3。化学成分はケイ素酸と窒素が主。ケイ素を含む鉱泉は体内の尿酸塩の排出を促し、皮膚を乾燥、抗炎症作用を及ぼす。ケイ素化合物は選択的に有毒物質に作用し、それらを無毒化した状態で体内から排出する。

*効能、適応症、サービス等に関しては、ホームページをご参照ください。<http://kuldur-06.narod.ru/>